

柳 敬助 略年譜

1881 <p>明治14年</p>	5月5日、上総国周准郡泉村（現千葉県君津市）に父・山田文安（医師）、母・はるの次男に生まれる。
1886 <p>明治19年</p> <p>5歳</p>	絶家となっていた親戚の柳家を継ぐ。翌年、靱山尋常小学校に入学。
1895 <p>明治28年</p> <p>14歳</p>	靱山尋常小学校を首席で卒業し、県立千葉中学校へ入学。在学中、堀江正章に絵を学び才能を磨かれる。1900年、千葉中学を卒業。父の希望に従い医者をめざし二高を受験するが失敗。画家への志が強まる。
1901 <p>明治34年</p> <p>20歳</p>	東京美術学校西洋画科に入学。熊谷守一、辻永、橋本邦助、和田三造の5人で入谷に一軒家を借り、共同生活を始める。
1902 <p>明治35年</p> <p>21歳</p>	第7回白馬会展に《田家》を出品。
1903 <p>明治36年</p> <p>22歳</p>	絵画勉強のため渡米を計画。教授・黒田清輝から時期尚早と言われるも、10月、東京美術学校を退学。11月、辻永らが発起人となり餞別が募られ、黒田清輝はじめ43人から総額28円10銭が集まる。12月12日、信濃丸にて横浜を出港。
1904 <p>明治37年</p> <p>23歳</p>	1月3日、セントルイス到着。セントルイス万国博覧会で働き、美術工芸の出品作品を見る。万博の終了後から翌年5月までのあいだにニューヨークに移る。
1905 <p>明治38年</p> <p>24歳</p>	ナショナル・アカデミーの夜学に入り、ジョージ・ブリッジマンに学ぶ。ニューヨーク・アート・スチューデントズ・リーグに入り、荻原守衛、戸張孤雁らと交友を結ぶ。ニューヨーク・アート・スクールに入りロバート・ヘンライに学ぶ。壁紙の図案などを描き学資を稼ぐ。
1906 <p>明治39年</p> <p>25歳</p>	8月、帰国した戸張孤雁の代わりにコロンビア大学植物学の教授・リチャーズ博士の学僕となる。高村光太郎を知る。荻原守衛とともに高村を訪問する。
1907 <p>明治40年</p> <p>26歳</p>	4月、弟・修造が、7月、長兄・誠が続けて亡くなる。友人・平井武雄とともにアート・スチューデントズ・リーグでウィリアム・メリット・チェイスに学ぶが、2ヶ月で再びヘンライの元に戻る。
1908 <p>明治41年</p> <p>27歳</p>	11月、母・はる亡くなる。相次ぐ訃報に、一人残された父を思い、帰国すべきか否か、迷いと悲しみのなかに年が暮れる。
1909 <p>明治42年</p> <p>28歳</p>	ヨーロッパをまわって帰国する決心をする。白馬会に出品。パリでは美術学校に通うも長続きせず美術館通いに明け暮れる。8月7日、ロンドンを伊予丸で出帆。9月中頃、帰国。千葉県中村泉に落ち着き、郷土の風物、近親、知人の肖像を制作。時折東京に出て荻原守衛、高村光太郎らと会談する。キリスト教思想家、新井奥遼 <small>（おうすい）</small> の門下に入り、終生奥遼を敬愛する。
1910 <p>明治43年</p> <p>29歳</p>	3月、父・文安が亡くなる。3月、荻原守衛に新宿中村屋隣りのアトリエ建設を一任し、千葉で制作に励む。雑誌『白樺』の創刊号に寄稿。4月20日、アトリエ落成の電報が届くが、荻原は同月22日に急逝。穂高での荻原の埋葬に立ち会い、遅れて来た高村光太郎と戸隠に向く。5月、第13回白馬会展に出品。『早稲田文学』（6月号）に碌山追悼文寄稿。6月、白馬会新会員に推薦される。7月、琅玕洞 <small>（ろうかんどう）</small> （高村光太郎の開いた日本初の画廊）で個展を開催。10月、第4回文展に《夫人》（モデル：永島瑛子）、《朱胴》（モデル：熊谷守一）を出品。《朱胴》で褒賞を受賞。秋、相馬黒光から橋本八重を紹介される。『白樺』ロダン第70回誕生記念号に寄稿。12月、輜重兵大隊に3ヶ月現役として入隊。

1911 <p>明治44年</p> <p>30歳</p>	4月、橋本八重と結婚、雑司ヶ谷に八重の母・橋本うめとともに住む。新井奥遼より「有神無我」の書が与えられ、自身の墓碑に刻む。第5回文展に病臥中の相馬黒光をモデルにした《病婦》を出品。11月、白樺主催洋画展覧会に出品。
1912 <p>明45/大元</p> <p>31歳</p>	4月、長女・禮子 <small>（ゆみこ）</small> が生まれ、新井奥遼が名付親となる。4月、故青木繁君遺作展に出品。《北原白秋像》（焼失）を制作。
1913 <p>大正2年</p> <p>32歳</p>	日本洋画協会会員となり、同協会と奈良教育会主催・夏期洋画講習会に講師として招かれる。9月、長男・文治郎生まれる。10月、第7回文展に《椅子に凭りて》を出品。10月、文展二部（洋画）二科制建白書提出発起人の一人となる。
1914 <p>大正3年</p> <p>33歳</p>	10月、二科会創立委員になり、会の創立後は監査委員となる。第1回二科展に《白シャツの男》（モデル：富本憲吉）《初夏（大和にて）》を出品（第2回展からは出品辞退）。12月、台湾へ旅立ち半年滞在（翌年7月中頃、帰国）。
1916 <p>大正5年</p> <p>35歳</p>	1月～4月、チフスにかかり入院。6月、二女・順子 <small>（よしこ）</small> 生まれる。第10回文展に《佐久間大将立像》（焼失）を出品。
1917 <p>大正6年</p> <p>36歳</p>	6月から、仙台、京都、上高地、乗鞍を旅行。妻・八重の恩師、日本女子大学校長《成瀬仁蔵氏像》（焼失）を制作。
1918 <p>大正7年</p> <p>37歳</p>	1月、弟死去。第12回文展に《野田大塊翁肖像》（焼失）を出品。
1919 <p>大正8年</p> <p>38歳</p>	2月、成瀬校長の叔母をモデルに《秦てる像》を制作。7月、槍ヶ岳、焼岳、乗鞍岳を登山。8月、長男・文治郎と京都を旅行する。《三宅雪嶺氏像》（焼失）を制作。
1920 <p>大正9年</p> <p>39歳</p>	5月、二女・順子がジフテリアで亡くなる。7月、福島会津地方を周遊。第2回帝展に《三宅雪嶺氏像》（書斎の雪嶺翁）（焼失）を出品。《阿武隈川》（焼失）《渋沢栄一氏像》（焼失）を制作する。《順子像》の制作にとりかかるが未完で終わる。
1921 <p>大正10年</p> <p>40歳</p>	6月、背部化膿により入院。8月、長男、長女と共に信州沓掛の平井武雄の山荘に滞在。10月、第3回帝展に《F氏の肖像》（モデル：藤山雷太）を出品。井口喜源治が上京し面談する。《渡邊由太郎肖像》を制作。リチャーズ夫妻が来日し、再会。
1922 <p>大正11年</p> <p>41歳</p>	5月20日、穂高での荻原守衛十三回忌の墓碑建立式に参列。その後新潟、福島、山形を周遊。10月、第4回帝展に《中原徳太郎肖像》（焼失）を出品。
1923 <p>大正12年</p> <p>42歳</p>	1月、金山平三、南薫造、平井武雄らと下諏訪桔梗屋に滞在し、《諏訪湖畔の雪》を制作。穂高に行き、荻原守衛の兄・望月穂一宅に滞在。《荻原十重十氏肖像》（焼失）、《望月ぶん刀自肖像》を制作。二人の子供と妻、亡くなった順子の肖像画が掲げられた家族団らんの一場面を描いた《或る日の画室》の制作を始めるが未完で終わる。3月、胃に異常が認められる。4月、愛宕下の宮原病院に入院し、レントゲン治療を受ける。5月16日、他界。
	9月1日、友人（石井林響・富本憲吉・金山平三・辻永・南薫造・平井武雄・森田亀之助ら）によって追悼展覧会（日本橋三越本店）が開催される。開会2時間ほどで関東大震災に遭い、遺作38点、友人の賛助出品64点が焼失。